

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 30

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 581. 内省(リフレクション)に関する誤解
- 582. 表現活動
- 583. ピアジェの発達理論
- 584. 修練との一体化
- 585. 間主観的領域への関心
- 586. 日記について
- 587. 言葉の淀みと開放
- 588. 言葉の密度
- 589. ダイナミックシステムアプローチとR
- 590. 言語体系の構築へ向かって
- 591. シンタククラス祭
- 592. 二つのコーディングマニュアルの作成
- 593. ホロン階層を持つ発達課題
- 594. 身体性を喪失した者たちの成れの果て
- 595. 打たれる体験と魂の抜けた人たち
- 596. 真冬の成層圏
- 597. 下痢と咀嚼
- 598. 新・新ピアジェ派としての私
- 599. 「キャリア形成」なるものについて
- 600. スキャフォールディングという支援の恩恵

---

## 581. 内省(リフレクション)に関する誤解

オランダ語の初級コースが終了して以降も、オランダ語の学習を着実に進めることができているのはとても喜ばしいことである。早朝の習慣の一つに、オランダ語の学習が確実に組み込まれていることを実感する。

語学というのは、継続が何よりも物を言う。外国語の学習は、継続的な鍛錬が確実な成果と結びつく最たる例だと思う。毎朝、数十分という短い時間ではあるが、それでもその時間は集中してオランダ語の学習を行うことを心がけている。こうした継続的な実践が、日々の生活の中でオランダ語を活用する際に、少しずつ成果として現れ始めているのを感じる。オランダ語の学習を終え、午前中に取り掛かっておきたい仕事をやり遂げてから、近所のサイクリングロードへランニングに出かけた。

一つの実践から他の実践へ、一つの仕事から他の仕事への流れが、滞ることのない大河の流れのように進行していく様子を見ることができる。午後からは、発達科学の領域に多大な貢献を残したジャン・ピアジェの仕事参考に、発達現象について少しばかり考えていた。近年、「内省(リフレクション)」という言葉が、各方面で聞くようになった。

この言葉が用いられる文脈には、各人の内面的成長や学びを深めることが目的として存在している。まさに、ピアジェが指摘しているように、私たちの知性が成長していく際に、外部環境との相互作用を通じて、自分の体験を絶えず「内面化(internalization)」していくことが重要なのだ。簡潔に述べると、私たちは、自分の体験を内面化していくことによって、内面化された体験が一つのまとまりとして組織化され、徐々に大きなシステムを構築していくようになる。そのプロセスを経ながら知性が育まれていく、とピアジェは捉えている。

しかし、多くの人が、「内省」と呼ばれるものを行っても、それほど体験が深まらず、自己の成長に繋がっていないように思えるのはなぜだろうか？おそらく、世間一般で内省と呼ばれているものが、ピアジェが言うところの「内面化」の半分の側面しか捉えていないからではないか、と思っている。

つまり、近年取り上げられている内省には、体験を表面的に振り返ることはあったとしても、その体験に自分独自の新たな言葉を当て、その体験を構造化し、さらに次の体験を生んでいく、という一

---

連のサイクルが欠如しているように思うのだ。要するに、「内省のための内省」が行なわれているだけであり、知性発達のサイクルが一切機能していないように思えるのだ。

発達のプロセスは各人多様であり、体験そのものに対する意味づけも、本来各人多様なものである。そうしたことから、重要なことは、自分独自の体験に対して、自分独自の言葉を紡ぎ出すことだと考えている。これは極めて当たり前のことのように響くかもしれない。しかし実際には、多くの人は自分の言葉を紡ぎ出すことをせず、自分独自の体験に対して、いかに他者の借り物の言葉を与えていることか。あるいは、自分独自の言葉を与えることに対して、いかに意識をしていないことか。そのようなことを思わされる。

こうした状況では、各人固有の潜在能力が開発されていくことはないように思える。なぜなら、上記で指摘したように、私たちは各人固有の体験と発達プロセスを持っており、固有の発達プロセスの中で各々の体験を醸成させていくためには、自分の内側から生まれる言葉という養分を与える必要があるからである。

各人固有の発達を「有機的な現象」と捉えるならば、自分の体験に他者の言葉を当てはめることは、そうした有機的な現象を歪めることにつながり、それは人工的な農薬を散布することに等しいように思える。発達原理の核の一つに、各人固有の発達特性があることを考慮すると、自分の言葉を見つけようとする試みと、自分の言葉を紡ぎ出していく試みは、自己の成長にとって極めて重要なことだとわかる。こうした当たり前の根幹原理を蔑ろにした実践が、世間の中で蔓延しているように思えて仕方ない。

### 【追記】

未編集の記事がいかんせん多くなってしまったためか、先ほど編集した20本の記事の前に、こちらの20本を編集する必要があったことに気づいた。今日は先ほどの20本の編集だけで終わりにしようと思っていたが、せっかくなので今日はこの20本まで編集する。

上記の日記の中でオランダ語の学習について言及しているが、今はオランダ語を毎日学習する習慣はない。フローニンゲンの街で生活をするに際して、オランダ語を話す機会が私にとってはスーパーの中しかない。そのため、スーパーという文脈で使われるオランダ語だけを習得して以降は、も

---

はやオランダ語の学習を毎朝行うことはない。しかしその代わりに、新しい習慣として作曲が加わった。これは正直なところ、オランダ語を学習する以上に私の日々を充実したものにしてくれている。そして、作曲が一生涯を通じてなされる取り組みであることを考えると、毎日作曲を行うという習慣は、きっとこれからも自分の人生を豊かにし続けてくれると確信している。フローニンゲン:2018/3/31  
(土)13:46

## 582. 表現活動

昼食後、一時間ほど仕事をしてから、いつものようにヨガのシャバーサナ瞑想をしながらの仮眠をとった。仮眠中、寝室の窓に雨がぶつかる音が聞こえた。午前中の晴れ模様を考えると、その雨は通り雨であったようだ。

仮眠を済ませて、再び書斎に戻り、窓の外からストリートを眺めると、雨の跡が見られなかった。どうやら、寝室側の窓の上を通った雲が雨を降らし、書斎側の窓の上の雲は雨を降らせなかったようだ。このような極めて局所的な現象があるものだと、改めて思い知らされた。今回の一件は、局所的な現象を見て、早急に一般化することの危険性を教えてくれたように思う。研究過程の中で、あるいは日々の探究の中で、早急な一般化を行うことを避けなければならない。

現在進行中の「卓越性(知性や能力が高度に発達した現象)」を取り上げているオンラインゼミナールの中で、表現活動の重要性について話題となった。私たちは誰しもが卓越の境地に至る種のようなものを持っているという考え方のもと、そうした種を開花させるためには、種を育てていくための行為や実践が不可欠である。そうした行為や実践の中でも極めて重要なのが、世界に対して自己を表現していくこと、あるいは、表現の産物を世界に提示していくことだと思う。

確かに私たちは、日々の生活の中で何らかの活動に従事している。しかしながら、自らの卓越性の種を開花させるためには、日々の活動に無自覚的に取り組むのではなく、活動の最中で表現の産物を意識的に残していくことが極めて大切になると考えている。なにやら、卓越性の発達プロセスにも、「自己創出(オートポイエーシス)」という現象が起こっているようであり、表現が新たな表現を生み、新たな表現がまた新たな表現を生むことによって、私たちの卓越性は磨きがかけられるという姿を見ることができると思う。

---

先ほどの仮眠中に湧き上がっていたのは、世界に対して何も表現することなしに、何らかの活動を続けていくことは、洞窟の中で瞑想に明け暮れているのと同じである、という考えであった。これまでの私は、いかに洞窟の中での瞑想に明け暮れていたのかを反省させられたのである。

こうした洞窟から抜け出るまでに、相当の時間を要したように思う。現在、意識的に取り組んでいることは、自分なりの表現活動を特定し、その活動に継続的に取り組んでいくことである。とにかく、内側のものを形として外側に提示し、それを積み重ねていくことが大事なのだ。私にとって、そうした表現活動の一つは、やはり文章を書くことなのだと思う。学術論文にせよ書籍にせよ、このような日記にせよ、自分にとって、書くということは、非常に大切な表現活動なのだと改めて思わされた。

フローニンゲンの街は、午後から夕方のちょうど中間地点に差し掛かっている。通り雨が過ぎた後、再び太陽の光が辺りを照らしている。冬の太陽らしい、穏やかで優しい光が辺りを包んでいる。書斎の窓から、鳥の群れが空を舞っているのが見えた。空を舞う鳥たちの一羽一羽が、各々の表現活動を行っているのだらうと思わずにはいられなかった。夕方から就寝まで、再び自分の仕事に取り掛かろうと思う。2016/12/2

### 583. ピアジェの発達理論

夕方から夕食までの時間、そして夕食後からしばらくの間、ピアジェの構造的発達理論に関する論文に目を通していた。ピアジェの関心事項の一つは、知性発達の領域全般型特性を明らかにすることにあつた。つまり、ある一つの知性領域——論理思考など——が次の段階に到達すれば、新たな段階の能力が、タスクや文脈を変えても発揮される、ということを証明しようとすることにピアジェの関心の一つがあつたのだ。

同時に、文化的な差異を超えた普遍的な知性発達モデルを構築することに、ピアジェの関心があつたように思う。ピアジェは、発達心理学者というよりも、知識の構築過程を探究する哲学者であつたため、それらの関心事項は、ピアジェが最も関心を寄せていたものではないかもしれない。

とりあえず、現代の知性発達科学の研究で明らかになっているのは、一つの知性領域が次の段階に到達したとしても、タスクや文脈が変われば、新たな段階の能力を発揮することは基本的にでき

---

ないということであり、文化的な差異によって、発達のプロセスは多大な影響を受けるため、万民に当てはまる普遍的な知性発達モデルを構築することは難しいということだ。

ピアジェの論文や専門書を読んでいて、時に混乱させられるのは、現代の知性発達科学の研究成果から言えば、ピアジェの発見事項は誤りを含んでいるものがあるのだが、知性は環境の中における具体的なアクションによって育まれる、というピアジェの主張そのものは、現在でも妥当性のあるものだ。

知性の構築活動は、具体的な文脈の中における特定のタスクに従事する中で起こるという主張と、ピアジェの発見事項は時に矛盾しているように思えることがあるため、困惑させられることがある。一人の科学者の仕事を真に理解するというのは、実際にはとても難しいことであり、私の誤読も多分にあるであろうから、引き続き、丹念にピアジェが残した論文や専門書に目を通していきたいと思う。

もう一点、ピアジェの発達理論が過去に頻繁に批判されていたのは、「構造」という言葉についてであった。ピアジェの発達理論の批判者の多くは、構造など存在しない、という主張をする。ピアジェが提唱した「階段状の発達モデル」は、これまでの実証研究からも、その誤りがすでに明らかになっているが、構造の存在に関しては、今でもその存在が揺らぐことはないと言える。近年の発達研究が明らかにしているように、発達のプロセスには、連続的な発達と非連続的な発達のどちらも含まれている。

構造の存在を否定する者は、非連続的な発達を強調する傾向が強く、実際には、発達プロセスが持つ連続的な性質を蔑ろにしていることが頻繁に見受けられる。非連続的な発達プロセスだけを見ていると、そこには何ら構造らしきものは見えず、変動の激しいプロセスにしか見えない。

しかしながら、マクロな観点で見ると、発達プロセスの中には質的な変容が何度も出現し、それらの質的な差異は、これまでのプロセスの中では見られなかったような発達特性を示すのである。それはまるで、次元の変化のようだ、と形容できるだろう。知性発達プロセスに見られるこうした次元の変化のことを、ピアジェは「構造」の変化、と捉えていたのである。構造を安易に否定する者は、結局のところ、発達プロセスに内在する質的な差異を見落とすことになるだろう。

---

ピアジェが提示した「構造」という概念に対しては、その他にも様々な批判の観点があり、同時に、構造を肯定する観点にも多様なものがあるため、それらの議論を踏まえて、自分なりの考えをより深めていきたいと思う。

#### 584. 修練との一体化

今日も一日が、一粒の時間感覚の中で一瞬に過ぎ去ったように感じた。読むこと、書くこと、考えること、仕事をする事、音楽を聴くこと、食事をとること、運動をする事、眠ることなどが、別個のものではなく、一つの総体となっているのを強く実感する。同時に、この総体と自分の存在が限りになく一つになっていることも感じているのだ。

全てのものとの一体感、一粒の時間が過ぎ去っていくという感覚の中で、毎日が自分の内側を通り抜けていく。自分が毎日という時間の中をくぐるのではなく、それは間違いなく、毎日という時間が私の中をくぐり抜けていくのだ、という感覚がある。

今日も、知性発達科学に関する論文を読む中で、奇妙な体験をした。これは時折自分の身に降りかかるのだが、ある論文や専門書を読んでいる最中に、突如として涙がこみ上げてくることがあるのだ。この涙を生み出す感覚を言葉にするのは非常に難しい。これはおそらく、何かに触れた感覚だとも言えかもしれないし、自分が途轍もない大きな何かの一部であるということを把握しているような感覚だと言えるかもしれない。

だが、それらの言葉では、まだ何かを見逃している気がしてならない。振り返ると、こうした感覚は、幼少の頃から時折自分の内側で生じていたものだったと思い出した。それは自分の存在の根元に関わる感覚であるし、自分の活動の根源に関わる感覚である。これらの感覚に対して、これから少しずつ自分の言葉を慎重に当てていく必要があるだろう。その先に、この感覚が真に自分の感覚として絶えず自分を支え、絶えず自分を導いてくれるように思うのだ。

日々の生活の中で、文章を書き続けることによって、ある時ふと、以前の課題が解決していることに気づくことがある。「自己を対象にした文章を書く」というのは、何か不思議な魔力を持っているように思う。書くことの力に関しては、未知なるものがあまりに多く、絶えず書くということを通じて、未知なるものを体験的に少しずつ解明していくようなことを無意識的に行っているのかもしれない。人間



---

の発達と同様、自分の言葉を紡ぎ出していくことの中にも、まだ掴めていない真理がそこに潜んでいるのがわかる。

そうした真理の一端すらも掴むことができていないことを考えると、やはり修練の量と質が圧倒的に欠落しているのだと思わされる。明日の朝から再び、一連の流れの中で、修練を継続させていく必要がある。自分にできる唯一のことは、修練との一体化による継続的な探究だけだろう。

#### 585. 間主観的領域への関心

他者との対話は、いつも不思議な体験として、自分の内側を駆け抜けていく。人と人が言葉を交わし合うことの中に、今の私では掴み取ることのできない何かが無数に存在しているのを感じる。オランダに来てからの最大の変化は、対話に対する意味付けが変わり、他者と対話をするという行動が増したことにあろう。日々の探究活動の性質上、どうしても書籍や論文という文字空間の中で過ごす時間が多くなるというのは、避けることができない。

だが、これまでの私は、そうした文字空間の中に閉じこもりすぎる傾向があったように思う。それに対して、今の私は、自分の内側の何かオープンなものに変わりつつあるのを実感している。極めて些細なことかもしれないが、日々の論文アドバイザーとの対話や友人との対話の中に、いつも新たな気づきや発見があり、その事実価値や意味を見出すようになっているというのは、自分の中の大きな変化なのである。

今日は、土曜日であるが、いつものように自分の仕事を午前中に行っていた。午後からは、二人の日本人留学生とカフェで対話を行っていた。カフェの中で談笑する他の客を見て、改めて、自然言語を用いて人間が意味を交換するというのは奇跡的なことのように思えた。

これは大げさかもしれないが、私が人と話をするとき、あるいは、他者が会話をしているのを見るときはいつも、そこでの営みが奇跡的なものに映る。今の私が考えを深めていきたいのは、まさに人と人との対話にあるのかもしれない。

---

これまでの私は、一人の個人が意味を生成することや言葉を紡ぎ出していくことに強い関心があった。現在、自分の中で少しずつ芽生え始めている関心は、二人以上の人間が共同で意味を生成することや言葉を紡ぎ出していくことにある、と言えそうである。

つまり、主観的な言葉の生成から、間主観的な言葉の生成に関心を持ち始めている、ということである。少しずつ、少しずつで良いので、他者と意味を共有することや、他者と意味を作り出していくことについて考えを深めていきたいと強く思う。間主観的な領域への私の関心は、オランダの地でようやく芽生えたものだと言えるだろう。

### 【追記】

この日にカフェで話をしていた二人は元気でやっているだろうか？一人はフローニンゲン大学からメキシコの大学に一年間ほど留学し、もう一人は京都大学に戻った。二人は今どのような人生を送っているのだろうか。これから午後が深まり、夕方に向かっていくフローニンゲンの中において、そんなことをふと思った。フローニンゲン:2018/3/31(土)14:06

### 586. 日記について

日々の状況がいかなるものであろうとも、そして、その日一日がいかに昨日と変わらぬものであるように思えたとしても、毎日絶えず文章を書き始めてから、ある程度の期間が経った。何かを継続させていくことの意義と価値について、日記を絶えず書くという体験を通じて大いに実感している。

今日は、昨日と異なる目新しい出来事があったのだが、不思議なもので、そうした珍しい出来事が自分の内側を刺激し、言葉を生み出してくれるとは限らないのだ。言葉がよどみなく流れるように生成されてくる時と、言葉の流れに滞りがある時の差について考えなければならない。自分の言葉がどのような状況下で生成されてくるのかを、まだ全くわかっていない、というのが実情である。

オランダで生活を始めて以降、米国で生活していた時と同様に、日本語の活字を読む機会がめっきり減っている。これは、日本を離れて生活をしているのであるから、当たり前といえば当たり前である。そうした最中、現在意識的に取り組んでいるのが、数週間に一度—できれば毎週末にしたいのだが—、日本から持参した和書に目を通すことである。実際には、森有正先生と井筒俊彦先生

---

の全集と、辻邦生先生が書き残した数多くの日記やエッセー集しか現在の自宅の本棚に並んでいないのだが、彼らが残した日本語の文章を読むという行為が、自分の精神の癒しや支え、さらには精神の肥やしになっていることに言葉にならない有り難さを感じている。

特に、森有正先生と辻邦生先生が書き残した日記には、大いに励まされるものがある。そして、大いに感化されるものがある。他者が書き残した日記というのは、とても不思議な力があるように思えて仕方ない。二人の日記を読んでいる時にいつも思うのは、なぜ彼らとその出来事を日記に取り上げ、なぜそのような情景描写を用い、なぜその出来事を通してそのような考えや感覚が芽生えたのか、ということが不思議なのだ。

表現を変えると、なぜそのような言葉がそのようなリズムで生成され、なぜ一つのまとまりとしてそのような姿を形作るのかが不思議なのだ。さらには、二人の日記には、彼らの固有性が凝縮されているだけではなく、固有性がある臨界点を超え、普遍性を身にまとっていることに驚嘆させられるのだ。

日記というのは、まさに私的なものであるがゆえに、固有性が色濃く反映されるのは間違いないだろう。だが、彼らの日記は固有性を超越したものが含まれているように思えて仕方ない。彼らの日記からいつも励ましを与えられるのは、二人の日記の中に、固有性を超えた普遍的な何かが宿っているからに違いないのだと思う。一人の人間の言葉が真に力を持つというのは、己の言葉が普遍的な何かを宿した時なのだ、とつくづく思う。

森先生にせよ辻先生にせよ、彼らの日記が完全に自分のために執筆されたものであったことを、本人自らが語っている。この点はとても興味深い。というのも、自分のために書き残した文章が、いつか自分とは全く別の人間の人生に大きな影響を与えることが起こり得るからである。

徹頭徹尾、自分のために書き残したはずの二人の日記が、彼らの死後、今の私にこれほどまでに大きな影響を与えているというのは、紛れも無い事実である。これは疑いようもなく、彼らの日記が私的な言葉を超えて、普遍的な言葉に昇華されていることの表れなのではないか、と思うのだ。「日々を記す」ことの意味や、個的な言葉が普遍的なものに変貌を遂げ得ることの意味について、さらに考えを深めていかなければならない。2016/12/4

---

## 【追記】

この日記にあるように、今の私も和書に触れる頻度というのは非常に少ない。フローニンゲンの自宅には、上記で言及した三名以外に、今年からもう何名かの日本人の著述家の書籍が加わった。彼らは順番に、福永武彦、小林秀雄、吉田秀和の三名である。三名ともに優れた執筆家であるが、特に前者二人の書籍を数多く年始に日本から持ち帰った。

それら三名の中でも、福永武彦氏の文章に最も感化されている。小林秀雄氏や吉田秀和氏が残した仕事は極めて重要であることに間違いないが、彼らはもしかすると超越的な世界まで自らの認識を深めることができなかつたのではないかと思わされる。世間一般では二人の慧眼は褒め称えられているが、どうも私には、評論という形式の限界が彼らの認識をより深い次元にまで成熟させていくことを阻害していたのではないかと思わされる。そうした判断を下すのは早計かもしれず、これから彼らの作品をもう少し丁寧に読んでいく必要があるだろう。

上記の日記で森有正先生や辻邦生先生の日記に対して述べていることがまさに、ここ最近主題として取り上げていた縁起への関与の本質的な意味だということに気づかされる。一人の書き残した文章が、その人物の死後も誰かの人生に影響を与え続けるということ、それはまさに縁起への関与がもたらす産物である。フローニンゲン:2018/3/31(土)14:24

### 587. 言葉の淀みと開放

昨日を振り返ってみると、自分の内側から言葉がほとんど出てこなかつた、という不思議な体験をした。一日の終わりにその日の振り返りを行うことや、一日のどこかで必ず、自分の思念や感覚を言葉にしてみる、ということを習慣にしてから随分と時間が経った。

昨日は、自分の言葉の流れに何やら淀みのようなものがあつたように思う。この淀みを生み出しているものが存在しているはずなのだが、まだそれを特定することができていない。言葉の流れを遮るものを特定することができた時、内側の流れの進行が、また新たなものに変貌を遂げるように思える。

---

書齋の窓から景色を眺めると、微量の雪が積もった車がストリートに停まっているのが目に飛び込んできた。路上に止められた車の数が多いのは、今日が休日の日曜日だからであろう。今日のフローニンゲンの街の様子は、日本でいう、正月の朝のような印象を私に与える。

初日の出が醸し出す独特の光の色合いや感触が、私の内側の世界に流れ込んでくる。薄黄色の柔らかい光と丸いものをなでるようなあの感覚を今の私は感じている。ここ何年も日本の正月を味わうことができていないのだが、数年ぶりに、今年は日本で正月を迎える予定である。その時の一時帰国で、自分がどのように正月を体験するのかをとっても楽しみにしてる。

昨日、知人の方から話を伺うと、オランダでは何やらクリスマスが二度あるらしい。少し調べてみると、12/6にシンタクラス祭というものが催され、12/5はその前夜祭が行われる日ということがわかった。街全体や河川に停められている船が、少しずつイルミネーションされ始めていたのは、シンタクラス祭を祝うためだったのだ、と気づいた。

それにしても、国によって様々な異なる文化的行事があるものだ、と改めて思わされた。そして、そうした文化的行事の裏には、その土地に積み重ねられてきた歴史や固有の意味が必ず存在しているのだ、ということにも再認識させられた。偶然にも、シンタクラス祭の前日は、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生とのミーティングがあるため、クネン先生にこの文化的行事についてあれこれ質問してみようと思う。

冒頭で言及したように、昨日は自分の言葉の流れに淀みがあり、それが影響してか、非常に暴力的な夢を昨夜見た。これは生物としての人間が誰しも根幹に持っている暴力性を如実に反映するような夢であった。自分の中に、強力な暴力性が存在しており、それが表出されるかのような夢であった。こうした夢を時折見るのであるが、夢の中で暴力性が表出されると、必ずその場面で目が覚める。それぐらい、そこでの暴力性の表出は激しいものだと言える。

そうした夢から覚める時、何かを発散させることによって得られる開放感のようなものをたいい感じる。今日も、そのような開放感を味わった。こうした開放感によって、言葉の流れを遮っていた障害物が流れていったように思う。ただし、そうした暴力性を生みだした自分のシャドウは、依然として私

---

の内側に残っているのだ、という感覚もある。こうした暴力性の根源を特定するには、まだ時間がかかりそうである。2016/12/4

## 588. 言葉の密度

言葉の密度について昼食をとりながら再び考えていた。これまでの自分の日記を眺めてみると、言葉の密度にばらつきがあり、常に変動していることがわかる。こうした日記を書くときに、いつも私は二つの方法で文章を書いていることに気づく。一つは、あらかじめ特定のテーマを設定し、それについて文章を書いていくというものである。

文章というのは、基本的にこちらの体裁をとるものだろう。主張したいテーマがあり、それについての構成や盛り込むべき論点などを事前に決定し、それに沿って文章を執筆していく、というのが文章の基本的なあり方だと思う。こうした文章を書くときには、事前にタイトルが決まっていることが多く、そのタイトルに合わせた言葉が紡ぎ出されていくことになる。

一方で、非形式的な日記という特徴を踏まえ、特に何もテーマを設定しない状態で、文章を書くというリズムに乗りながら、テーマを探索し、そのテーマについて考えを書き留めておく、という方法を採用することがある。この方法を採用すると、事前の構成案がないため、当然ながらストーリーが錯綜としたものになってしまったり、脈略のない文章が生まれてしまうという危険性がありながらも、この方法でしか生まれない言葉や文章のリズムがあるように思うのだ。

両者のスタイルとそれぞれの言葉の密度を比較してみると、概して、事前に特定のテーマを設定して文章を書いていくときのほうが、言葉の密度が高いように思う。確かに、後者のスタイルの中では、言葉の密度が希薄なものになりがちなのだが、後々に密度が高くなる可能性を秘めた言葉が生まれることを頻繁に経験している。あるいは、後々に密度の高い言葉を生み出すテーマが見つかることがあるのだ。

その他にも、非常に基本的なことかもしれないが、文章を執筆するときの自分の精神状態や身体状態に左右される形で、言葉の密度が変化することにも気づくことができる。昨日、私に大きな影響を与えてくれた先達の日記を読むことの意義について言及していたように思う。彼らの日記を読んでいると、全体を通して常に高い密度の言葉が綴られていることに気づく。しかし、彼らにも精神的・

---

身体的な変動性があるため、言葉の密度が非常に微細なレベルで変動していることがわかるのだ。

ここからも、言葉というのは多分に精神的であり、多分に身体的なものなのだということに気づく。言葉の密度の変動性は、私たちの精神的・身体的な変動性と密接に関わっているのである。やはり、強靱な密度を持つ言葉の持ち主は、強靱な精神と身体を兼ね備えており、言葉の密度の変化は、書き手の内側のリズムを如実に物語ってくれるものなのだと思う。

最後にもう一つ、自分が取り上げるテーマや項目によっても、言葉の密度にばらつきが生まれることがわかる。例えば、私が長らく親しんだ構造的発達心理学の観点から知性や能力の発達について取り上げるときと、直近の数年で探究を開始した複雑性科学の観点から知性や能力の発達について取り上げるときとは、やはりそれらの文章で表現される言葉の密度には違いあるように思う。

自分の内側で、一つの知識体系が構築されていくというのは、まさに様々なテーマや項目に関する自分の言葉の密度が高まることによって、一段高い次元でそれらのテーマや項目を束ねられることを意味するのだろう。今、私が取り組んでいることは、テーマや項目ごとの自分の言葉の密度を分析し、一つ一つの言葉の密度を高めるために意識的に文章を書き留めておく、ということである。この作業も、自分の内側の成熟過程と同様に、歩みは非常にゆったりとしたものである。

#### 589. ダイナミックシステムアプローチとR

以前言及したように、私の書斎には常に何かしらの音楽が流れている。これまでは、ピアノ曲を中心に聴きながら仕事をするが多かった。一昨日、偶然ながら、作曲家の久石譲氏の映画音楽を聴く機会があり、とても感銘を受けた。そこで流れていた全ての曲をダウンロードし、今日も朝からずっとそれらの曲を流していた。音楽に救われている、という感覚がまたさらに強まったように思う。音楽が日々の自分の支えになってくれていることに対して、感謝の念が強まる毎日である。

午後から夕食までの間、「複雑性と人間発達」のコースで取り上げられた論点の中で、特に自分が理解を深めたいものを抽出し、関連論文を片っ端から読んでいた。こうした作業の中でふと、初回のクラスでクネン先生が述べていた何気ない一言を思い出した。

---

基本的に、ダイナミックシステムアプローチの数式モデルの多くは、エクセル上でシミュレーションが行える。クネン先生が述べていたのは、統計解析向けのプログラム言語Rを活用することによって、ダイナミックシステムアプローチのシミュレーションが可能である、ということであった。仮に、Rの中でダイナミックシステムアプローチのシミュレーション作業が行えるのであれば、非常に便利だと思った。というのも、研究プロセスの中で、自分のデータに対してRを用いた統計解析と、エクセルを用いたシミュレーション作業を別々に行おうと思っていたため、それらの作業が全て、Rを用いて行うことができるのであれば、とても効率的だと考えたからである。

ロサンゼルス在住時代に、Rとダイナミックシステムアプローチの学習を独学で進めていた時に、“Solving differential equations in R (2012)”という専門書を購入し、Rを用いて微分方程式を解く、というスキルを向上させようとしていた。本書を二回ほど繰り返し通読し、書籍の中に記載されているプログラミングコードを実際に自分の手を動かしながら書いていき、Rを用いて微分方程式を解くということをしていった。本書の前半部分は、以前受講していた、サンタフェ研究所が提供している複雑性科学のオンラインコースで扱ったような概念や方程式を取り上げている。

そのため、前半部分に関しては、内容を理解しながらプログラミングコードを書くことができていた。しかし、本書の後半は、常微分方程式を超えて、偏微分方程式を取り上げているため、当時の私は、内容を理解することなく、ただ単にプログラミングコードを書いていただけのように思う。

今、少しばかり悩むのは、知性発達研究を進める中で、応用数学——特に微分積分学——に関する理解をどのレベルまで高めていくか、ということである。明らかに、本書の後半部分で取り扱われている数式モデルは、これから数年間の自分の研究で用いるとは思えないほど高度なものである。微分積分学に関する自分の学習目標のようなものがないため、とりあえず現在は、牛歩の進度で、微分積分学について理解を深めようとしている。しかしながら、どこかで必ず、体系的に微分積分学を学ばなければ、一向に理解が進まないような気もしている。

微分積分学を体系的に学ぶ日がいつになるのかわからないが、それを行うことによって、現在手持ちの専門書や論文の理解がより容易かつ深いものになるだろう、と気づいている自分がいるのは確かだ。「Rによるダイナミックシステムアプローチを活用した発達科学研究」というような専門書が登場することを待望する。仮にこのような専門書が出版されれば、ぜひとも購入したい。



---

そのようなことを考えながらも、今の私がとにかく取り組むべきことは、ダイナミックシステムアプローチに含まれる多数の概念の意味を的確に掴むことにあるだろう。そこで登場する概念の数は非常に多く、それらひとつひとつの言葉の意味を掴み、自分の言葉としてそれらを表現することが、最優先にされるべき事柄である。

その際に、個別の概念の意味を押さえながら、概念のネットワークを構築していくことを絶えず意識している。一つ一つの概念を理解する際には、それらを点と見立て、別々に意味を把握していく必要がある。だが、それぞれの概念の意味が分離した状態では、知識の体系は構築されない。それらの概念を結びつけていくネットワーク化の作業が必ず要求されるのだ。

「ダイナミックシステムアプローチ」という名前が付き、知性発達科学の範疇にある世の中の専門書は、大半のものが書斎の本棚の中にある。現在は、大学のオンラインジャーナルツールを有効活用し、自分の専門分野と関わる「ダイナミックシステムアプローチ」と名前がつく論文は、とりあえず全てダウンロードし、プリントアウトするようにしている。

毎日着実に進めているのは、複数の専門書と論文を行き来しながら、ダイナミックシステムアプローチに関する概念を多様な文脈の中で理解することである。異なる文脈の中で同じ概念を目にすると、その概念に対する意味の幅が広がり、そこから意味を深めていくきっかけが生まれると考えている。一つ一つの概念を深く、そしてそれらを組み合わせたネットワークの密度を濃くすること。何よりもまずはそれを重点的に行う必要がある。それらの概念をできる限り自分に引きつけ、自分の内側の感覚を通して意味を驚掴みにしていくこと。そうした意識が重要だ。2016/12/4

### 【追記】

この日記で書かれているように、微分積分学、あるいはより応用的な数理モデリングに関する体系的な学習をこの秋から始めることになるかもしれない。まだ確定はしていないが、仮にこの秋から米国の大学院に戻ることにできれば、その応用数学学科のコースをいくつか聴講したいと思う。それらのコースを通じて、ダイナミックシステム理論に対するさらに深い理解を獲得できるようにし、何よりも数理モデルの構築方法に対してより習熟したいと思う。秋から米国に戻ることにできれば、それは新たな探究の始まりを意味するだろう。フローニンゲン:2018/3/31(土) 15:07

---

## 590. 言語体系の構築へ向かって

言語の習得というのは、本当に継続と積み重ねの賜物なのだと実感している。毎朝、わずかばかりでもいいので、必ずオランダ語に触れるようになってから、少しずつオランダ語が身体に染み入ってくるようになった。もちろん、身体の深い部分に染み渡るような段階ではなく、現在は、オランダ語に拒絶反応を示すことがなくなった、という意味での浸透感覚が芽生えている段階だ。それにしても、こうした感覚が自分の中で芽生えることになろうとは、四ヶ月前に日本にいた時には想像もつかなかった。

新たな言語体系が自分の中で獲得されつつあるという感覚が芽生えたのも、オランダ語を日々少しずつ取り組んできたからに他ならない。オランダ語に加えて、英語もより高度な体系として自分の内側で構築されていくように日々精進をしている。このようにオランダ語や英語という外国語に付け加えて、自分の専門領域の言語体系の土台を堅牢なものにし、その土台に少しでも高さを加えていくようなことを毎日意識的に行っている。

こうした実践の裏には、今の私の専門領域内での言語体系や自分の外国語の言語体系は、自分の母国語の言語体系と同じで、全くもって未成熟だという思いがある。兎にも角にも、毎日自分が向き合うべき対象は、己の言葉である。言葉しかない。自分を取り巻く言葉と真摯に向き合うことによって、己を陶冶していくことしかないのである。そのような思いが、オランダでの日々が経過していくごとに強まっていく。

しかし皮肉なことに、こうした思いが日増しに強くなっていったとしても、当の言語体系の方は一向に深まっていけないのだ。こうしたプロセスは、実践を継続させていくことによって、目には見えないところで徐々に進行している流れのようなものである。それらの流れが大きくなるとして実感できるまでは、どうしても時間がかかるのだ。焦らずに、確実に、この流れそのものを太くするように、毎日自らの言葉と向き合いたいと思う。

早朝に行うオランダ語の学習時間はとても短いものである。長くても30分ほどである。これ以上連続してオランダ語を学習することは、今の私にはできない。逆に、日々の研究活動の中で、専門分野の言語体系を構築していく営み、つまり専門書や論文を長時間にわたって読むことができているの

---

は、自分がうまく複数の専門領域を行き来しているからかもしれない、と思った。要するに、私が意識的かつ無意識的に行っているのは、複数の専門領域の言語を交互に学ぶことである。これによって、集中力を保ったまま、長時間にわたって多様な学術言語体系と向き合うことができているのだと思う。

ここからは、英語が自分に肉薄してきたように、専門分野の言語体系が自分に肉薄してくるような促しを行いたい。一つの単語が真に自分の単語になるように、一つのセンテンスが真に自分のセンテンスになるように、時間をかけながら専門分野の言語と向き合っていく必要がある。それを可能にするのは、兎にも角にも継続的な実践である。それらが目に見える結果として現れるのには時間がかかる。これを常に念頭に入れながら、専門領域の言語体系を堅牢にしていきたいと望む。

自分の精神と肉体を通して言語体系を構築していくこと。これが何よりも重要だ。当該専門領域内で新しい言葉を生み出すのは、当分後のことである。最優先されるべきことは、既存の言語体系を深く確実に習得することだ。これを蔑ろにしてはならない。特定の領域で専門家として活動するためには、その領域の言語体系を獲得することが最低限要求されるのだ。自分独自の専門性とは、そこからさらに歩みを進め、自分独自の言語体系を形作っていくことである。

外国語学習と同様に、これらの歩みは遅いのが当然だ。自分独自の言語体系を形作っていくための土台として、まずは既存の言語体系を確固としたものとして身に付けたいと思う。自分を取り巻く多様な言語体系を、何にもまして継続的に体験を通じて学んでいきたい。ただただ言語と向き合いたいという気持ちでいっぱいである。2016/12/4

#### 591. シンタクラス祭

フローニンゲンの街が白銀世界になりつつある。今朝の起床後、書斎の窓から見える風景の中に白色が強まっているのを実感した。今日は、最高気温ですらマイナスを記録している。このような寒さの中、午前中に論文アドバイザーのサスキア・クネン先生の研究室を訪問した。先生の研究室に向かうまでの道すがら、気温の低さとは正反対に、自分の気持ちは高揚していた。ノーダープラントソン公園も、すっかりと一面が白銀色に染まっていた。

---

公園内の池に差し掛かると、池が凍り始めていることに気づいた。まだ凍っていない部分の上を、何羽かのカモが泳いでいた。池の中を泳ぐカモを見て、「凍り始めている池の中を泳ぐあれらのカモは寒くないのだろうか？」と思わずにはいられなかった。池に近い岸を見てみると、たくさんのカモがそこで休んでおり、私と同様の眼差しで、泳いでいるカモを見つめていた。池の上を優雅に泳ぐカモたちのたくましさは、実に見事である。

それにしても、空がなんと澄み渡っていることだろうか。空を見ているこちらの心も澄み渡るかのようである。外気の寒さによって引き締まった空気を吸いながら、私は先生の研究室へと向かっていた。こうして地に足をつけながら歩いていると、地上をこの足で歩くことの意義を強く感じる。日々の探究生活の最中、概念世界の中での仕事がいかに多くても、自分の足でこの世界を歩くことを忘れてはならない。

この世界での一步一步の歩みが、内面世界の成熟への歩みと一致しなければならない。そのようなことを考えさせられていた。クネン先生の研究室に到着すると、いつものように雑談からミーティングが始まった。最初の話題はもちろん、寒さが深まる今日の天気についてであり、今日の晴れ渡る空についてであった。

その後すかさず、先日友人から話を聞いていた、「シンタクラス祭」について先生に質問を試みた。オランダには、クリスマスが二回あり、その一つが12/6のシンタクラス祭である。この不思議な休日について、詳しいことを知りたかったのだ。

**私:**「先生、そういえば先日、オランダにはクリスマスが二回あると聞きました。『サンタクロース』ではなく、『シンタクラス』がやって来るとか……。」

**クネン先生:**「ええ、そうよ！ちょうど明日がシンタクラス祭ね。」

**私:**「よろしければ、シンタクラス祭の背景について、特にその歴史について教えてもらえますか？」

**クネン先生:**「それは、私の好きなテーマの一つだわ。何時間でも話せるわよ(笑)。長めのバージョンと短めのバージョンのどちらがいい？」

---

私:「短めのバージョンでお願いします(笑)」

その後、シンタクラス祭の歴史について、先生からあれこれと話を伺った。なにやら、シンタクラスはオランダ人ではなく、もともとはトルコの聖人だったようだ。シンタクラスからは、贈り物のみならず、詩のようなものも子供達に贈られるそうだ。この詩は、贈り物を受け取る子供にまつわる内容が記載されており、その子供の悪い癖などをユーモアを交えながら指摘する内容になっているそうだ。

近年では、両親の間でもでも詩を交換し、日常口に出して言えないお互いの欠点をユーモアを交えながら指摘し合う、とクネン先生は笑いながら説明をしていた。シンタクラス祭の当日は、各学校に専用のシンタクラスが現れ、街中にはたくさんのシンタクラスで溢れ返るそうである。

ピアジェの発達段階モデルで言うところの「具体的操作段階」の前期にいる子供たちは、街中でたくさんのシンタクラスを目にすると、自分が先ほど学校で目にしたシンタクラスの存在と混乱してしまう、という微笑ましい話もあった。私も明日、シンタクラスを見物しに街中に足を運んでみようと思う。2016/12/5

### 【追記】

クネン先生とのこの日のやり取りは未だに鮮明な記憶として私の中に残っている。今年のシンタクラス祭の時にも、この時のやり取りを思い出していた。また、ここでのやり取りは、今年の夏に行われた個別の卒業式の際に、先生が私との思い出の一つに挙げていたものである。はて、シンタクラス祭にまつわる先生の長い方のエピソードはどのようなものなのだろうか？という関心が微笑ましく芽生える。

クネン先生とは、今年の六月にアムステルダムで行われる国際ジャン・ピアジェ学会で会うことになっている。クネン先生はゲストスピーカーとして登壇し、私は自分の研究成果を発表する。その時にシンタクラス祭の長い方のエピソードを聞くことはしないだろうが、そこでまた先生とゆっくりと話をしたいと思う。フローニンゲン:2018/3/31(土) 15:21

---

## 592. 二つのコーディングマニュアルの作成

ここ最近では、他の仕事を優先的に取り上げていたため、自分の研究から少し手を離していた。ここまでの進捗はとても順調であり、毎回のクネン先生とのミーティングのおかげで、確実に研究を前に進めることができている。

今日のミーティングでは、教師と学習者間の行動分類を行うための、私が作成したコーディングマニュアルについて最初に取り上げた。先生からの修正事項もほとんどなく、このコーディングマニュアルの出来には満足している。今後、一つだけ改善するのであれば、教師がクラス内で行う行動の中で、機能的に同一に思えるある二つの行動が別々の分類になっていたため、それを一つにまとめてもいいだろう、というフィードバックを受けた。

実は、この点については私も気になっていたのだ。正直なところ、分類表の見目の美しさを考慮して一教師と学習者の行動分類が対称を成すように一、それらの行動を二つの概念に分類していたと言える。しかし、クネン先生の指摘のように、分類表の対称性を確保する必要性はさほどなく、意味のある分類を行うことが何よりも重要だ。この分類に関しては、また修正を加えていきたい。

とりあえず、現段階でのコーディングマニュアルをもとに、統計分析を行ってみることにした。教師の行動を七つの概念カテゴリーに分類し、学習者の行動を八つの概念カテゴリーに分類することができた。実際のデータを見ながら、教師のどういった行動が、学習者のどのような行動を引き出しているのかを、この7×8のマトリクスを埋めることによって分析していくことが最初のステップである。五回にわたる各クラスと全体のクラスに対して、合計六つのマトリクスをまず作成しようと思う。

このマトリクスを作成する段階から、統計解析用のプログラミング言語Rを活用していこうと思う。Rを数ヶ月間触っていなかったもので、プログラミングコードを書く感覚を取り戻さなければならないが、Rを用いることによって、データ解析が効率良く進むと期待している。

この作業に取りかかる前に、Rを活用することができるように、データ内の概念カテゴリーの名前などを加工しておく必要がある。こうした加工作業に並行して、概念カテゴリーの分析が適切なのかをもう一度確認しておこうと思う。このデータに対して、まずは教師の行動と生徒の行動がどのような関係にあるのかを分析するため、カイ二乗検定を行う予定である。

---

その次にクネン先生と話し合ったのは、カート・フィッシャーの発達モデルを用いたコーディングマニュアルの作成である。マサチューセッツ州のレクティカに在籍していた時に、フィッシャーのスキル尺度を用いたプロジェクトに従事していたが、今回のデータに対して、自分でコーディングマニュアルを作成していくのは、なかなか厄介な作業である。

測定者間信頼性を確かなものにするために、正確かつ明瞭な分析基準を作っていく必要がある。この作業が難航すると思われるのと同時に、そのコーディングマニュアルを用いて、クラス内でのすべての発話をフィッシャーのスキル尺度で測定していくことも骨の折れる作業だろう。合計で500個近い会話を分析する大変さは目に見えているが、このプロセスを経ることによって、フィッシャーのスキル尺度に対する理解が格段に深まると思っている。

今週中に、上記のマトリクスの完成に向けて研究を進めたい。また、来週の木曜日に行われる研究プロジェクトのプレゼンに向けて、これから発表資料を作成していこうと思う。このプレゼンが終われば、早いもので冬休みに入る。2016/12/5

#### 593. ホロン階層を持つ発達課題

昨日ふと、ここ最近の自分の文章を眺めてみると、起床した時の感覚や情景描写などから言葉を紡ぎ出していることが多いことに気づいた。文章にするテーマが決まっている時でさせ、突然にそのテーマから言葉を紡ぎ出していくのではなく、その文章を今まさに書こうとしている自分を取り巻く感覚や情景描写を行うことが多いようだ。文章を書くという行為も運動と同じで、準備体操が必要なのかもしれない。文章を書いているその時にしか湧き上がらない感覚やその瞬間に目に入る情景を描写することは、私にとって、文章を書く準備体操として機能しているのだろう。

その場でしか生じない内側の感覚というのは、非常に大切なものだと思う。時に、文章のテーマ以上に、そうした感覚を書き留めておく方が、自分にとっては重要なことさえある。確かに、その場で生起する感覚を描写することによって、本来の文章のテーマと大きく脱線することもあるが、不思議なことに、これから書こうとする文章のテーマと大きく合致することもあるのだ。これは一体どういうことなのだろうか？文章のテーマは、形になる前から、書き手に対してある感覚を触発しているようなのだ。そのように考えると、こうした感覚が文章のテーマと合致するのは必然的なように思う。

---

昨日と同様に、朝から久石譲氏の音楽を流している。ある曲に差し掛かった時、突然、四年前のサンフランシスコ時代の記憶が蘇ってきた。それはサンフランシスコの街にある険しい坂道を登っている記憶と、坂道の頂上からサンフランシスコの街を一望した時の清々しい記憶であった。

特定の音楽が特定の記憶と紐付いていることは、非常に不思議な現象だと思う。時を忘れるかのように、そして時を逆戻りするかのように、しばらくその音楽に耳を傾けていた。振り返ってみると、サンフランシスコ在住時代に私が向き合っていた課題を、自分がどのように乗り越えていったのか定かではない。おそらく当時の課題は、自律的な自己の確立にあったように思う。

この課題は非常に大きなものとして、当時の自分の目の前に立ちふさがっていたと記憶している。先日、論文アドバイザーのサスキア・クネン教授が執筆した秀逸な論文“Development of meaning making: A dynamic systems approach (2000)”を読んでいた。この論文は、ロバート・キーガンの発達理論の中にある推測的な仮説モデルをダイナミックシステムアプローチのシミュレーション手法を用いて検証していくという、非常に興味深いテーマを取り上げている。

この論文を読みながら、発達課題を当人が自覚することの難しさと、発達課題を乗り越えていくことの難しさを感じていた。特に、発達課題を乗り越えていくというのは、至極難しいものだと思うのだ。なぜなら、発達課題とはそもそも、明確な一つのまとまりとして私たちに提示されているわけではなく、無数の要因や要素が絡み合う複雑かつ曖昧な総体として私たちに提示されており、そもそもそれを「乗り越えていく」という言葉が通用しないように思えるからである。

上記の中で、当時の私が抱えていた課題を「自律的な自己の確立」という一言で表現したが、実際には、もっと曖昧で複雑な課題であったように思う。こうした課題を自分が「乗り越えた」と言い切ることができないのは、もしかすると、発達課題にも、「含んで超える」という発達の原理が当てはまるのではないかと思う。つまり、一般的に発達心理学のテキストで言われているように、私たちは発達課題を完全に乗り越えてから次の発達段階に到達するのではなく、発達課題とはそもそも、常に以前の課題の一部を引き継いでいるようなものに見えるのだ。

そのため、発達課題を乗り越えながら進むのではなく、発達課題を引きずりながら前へ進むことが重要な気がしている。アメリカの思想家ケン・ウィルバーが提唱した「20の進化の法則」の一つに、「リ



---

アリティはホロンで構成されている」というものがある。発達課題というのも、私たちの発達プロセスと同様に、ホロン階層で構成されていると考えてもおかしくはないだろう。それゆえに私たちは、曖昧模糊とした発達課題を常に引きずりながら、それを含んで超える形で歩みを継続させていくしかないのだろう。

### 【追記】

この日記を読み返しながら、確かに私は文章を書き始める時に、たいていその瞬間の自分の感覚や景色に対する情景描写から筆を進めることが多いことに気づかされた。それはまさに、この日記で述べているように、文章を書くための準備運動のような側面があるだろう。さらには、その瞬間の自分の感覚や目に映る景色が実は重要な意味を持っており、それに焦点を当てようとすることによって、思わぬ意味が開示されるということを経験的に知っている自分がいるようだ。

「今この瞬間の外の世界には無風の風が流れている」とこの瞬間の世界を表現することができる。その際に、こうした一見する客観的な情景描写の中にも、多分に自分の主観的な思考や感覚が息づいていることに気づくことができる。今のそのセンテンスを読んだ時、「ああ、自分はこの瞬間の中に静寂さを感じ、静寂さの中に動的な側面を見出していたのだ」ということがわかる。客観的なものへ、主観的なものへ、主観的なものは客観的なものへと昇華変容させることが、主客二分を超えた生き方なのではないか。そんなことをふと思う。フローニンゲン:2018/3/31(土) 15:37

### 594. 身体性を喪失した者たちの成れの果て

昼食前のランニングまでの時間、「複雑性と人間発達」の第四回目のクラスに向けて、少しばかり予習をしていた。第四回目のクラスを担当するのは、サスキア・クネン教授ではなく、物理学者のラルフ・コックス教授である。クネン教授は発達心理学者であるため、彼女のクラスは心理学の色が濃い。コックス教授は物理学者であるため、彼のクラスは数学の色が濃い。今回のクラスでは、「システムの特定」や「フラクタルの尺度化」など、少し専門的な内容を扱うことになっている。

コックス教授が担当した以前の内容について記憶を辿っていると、ダイナミックシステムのモデル化の技法について説明したスライドを思い出した。「ダイナミックシステム」と一口に言っても、実際には、異なる特徴を持つ多様なダイナミックシステムが存在している。物理学の観点から言えば、1次

---

元からn次元までのダイナミックシステムが存在しているし、数学の観点から言えば、システムの決定論的度合いと確率論的度合いによって、様々なダイナミックシステムが存在していることがわかる。

次元を縦軸に、決定論的・確率論的度合いを横軸に取った図を眺めると、ダイナミックシステムアプローチで扱うことのできる領域がごく限られたものだということに気づく。ダイナミックシステムというのは、とても奥の深い現象なのだと改めて思った。第四回目のクラスで得られるであろう知見をもとに、少しでも自分の探究が前に進んでくれればと願う。

毎日、雑多なテーマに対して取り留めもない思考が巡っている。先日からの関心を引き継いでいたのは、骨太の思考をいかに獲得するかというものである。専門書や論文を読む際、あるいは、他者の発言に耳を傾ける際に、その著者や発話者が、実に骨太の思考を展開していることに気づくことがある。こうした骨太の思考を可能にするものについて考えていた時、そもそもそうした思考を支えるための、強靱な言葉を獲得することが必要なのではないかと思った。強靱な言葉は、まさにその人の深層に根付いた言葉である必要があるだろう。

逆に述べると、その人の深層に根付いていない言葉は、強靱な言葉として外側に響いていかない、ということである。世の中で用いられている言葉を眺めてみると、強靱な言葉というものがめっきり減少しているように思う。その様子はどこか、多くの人たちが借り物の言葉を用いて毎日の精神生活を営んでいるように映るのだ。多くの人たちが情報を自ら生み出す生産者ではなく、単なる情報の消費者に成り下がっているのは、上記の点と密接に関係しているように思う。

他者からの借り物の言葉を用いて精神生活を営んでいる者に、情報の作り手になれと言っても、それは到底無理な話だろう。情報社会の中で生きているというよりも、情報社会の中で操作されているという状態から少しでも脱却するためには、まずは自分の内側に根ざした言葉を獲得することが大切なのではないだろうか。こうした言葉を獲得することは、情報を自ら生産するために重要であるばかりか、借り物の言葉を見分ける胆力につながると思うのだ。

昨日、発達心理学の古典的な専門書を読んでいた時、私たちは言葉を獲得する以前に、身体動作を獲得する必要がある、という当たり前の記述に打たれるものがあった。私たちの言葉は、そもそ

---

も身体的な動作を獲得する発達段階を基礎にして生まれてくるものなのである。昨今、胆力のないひ弱な言葉しか見かけなくなっているのは、現代人は自分の身体性を蔑ろにしているからではないか、あるいは、身体を蔑ろにする形で発達を遂げてきてしまったからではないか——これは歪曲された不健全な発達と言えらう——、と思った。

自分の身体性を蔑ろにすることは、骨太の思考を不可能にするばかりか、もっと深刻なのは、自分の内側の感覚に根ざした己の言葉を喪失することにつながる、ということだろう。そして、己の言葉を喪失した者たちは、情報の単なる消費者に成り下がり、情報社会の中で操作され続ける存在になる、という構図が生まれている気がしてならない。2016/12/6

### 595. 打たれる体験と魂の抜けた人たち

「真に考え抜き、真実に生きたことだけが人間を打ち、人間を打ったものだけが人間の遺産となる」という、フランス文学者であった辻邦生先生の言葉が脳裏から離れない。

人を打つことができるのは、本当にごく限られた人だけなのではないか、と確かに思わざるをえないことがよくある。それぐらい、人を打つ領域に到達するのは、生半可なことではないと思うのだ。しかしながら、私は、人を打つことができる人たちの共通点のようなものを最近見出しつつある。人を打つ領域にたどり着くための最初の出発点は、人に打たれることである。

つまり、他者を真に打つことができるのは、他者から真に打たれたことのある人間である、ということだ。これまで、数多くの人を打ってきた偉人たちを見てきたが、彼らに共通しているのは、彼ら自身も、人生のどこかで必ず他者から打たれているのである。ひょっとすると、人を打つことの最大の特徴は、伝播することなのかもしれない。ある偉人の霊力が、ある人物を打ち、その人物はその偉人の霊力の恩恵を授かる。そしてそこから、その人物は自分の霊力を高めていくのである。

そのようなことが起こっている気がしてならない。ここで注意が必要なのは、他者から打たれたことのある人物が、必ずしも他者を打つ人物に変容するとは限らない、ということである。最も重要なことは、他者に打たれてから、自らの霊力を磨く鍛錬に継続的に取り組めるかどうかにある気がしている。

---

他者から打たれる体験というのは、夏の陽気に触れることに似ている。夏の陽気に浮かれたままであつては、自分の中の霊力は深まりを見せることは一切ないだろう。大切なことは、夏の陽気をやり過ごし、秋を通過し、光の当たらぬ真冬の時代の最中で、いかに継続的に鍛錬を積むことができるかにある、と私は考えている。

私を打ってくれた偉人たちは皆、必ず他者から打たれ、自身の真冬の時代の中で、愚直に鍛錬を積んでいたことを教えてくれる。そんな彼らが残した仕事に打たれるのは当然でありながら、同時に、彼らの生き様そのものに対して、私は打たれるのだ。そのようなことを考えながら、また別の観点からこの話題について考えていた。

何かに打たれる体験は、不思議なことではないはずなのに、何かに打たれることのない人がいかに多いことかに気づかされる。私は、何かに打たれるための最低限の条件は、自分の魂を持っていることだと思う。人間であれば誰も必ず魂を持っている、という言説に対して、私は疑いの目を向けるようになってきている。

自分の魂を持っていることは、何かに打たれることの最低限の条件だと述べたが、自分の魂を持っていさえすれば、人はどこかで必ず何かに打たれるのではないか、という発想を私は持っている。世間を見渡して、何かに打たれることのない人が繁殖しているというのは、自分の魂を持っていない人間が増殖していることの表れなのではないかと危惧している。

より正確には、この社会には、己の魂を明け渡してしまった人たちや、魂を剥奪されてしまった人たちが溢れ返っているように思うのである。魂を現世のくだらぬ物と交換させる狡猾な仕組みや文化、そして魂を剥奪するための巧妙な仕組みや文化がこの現代社会に横たわっている気がしてならない。そうでなければ、これほどまでに魂の抜けた人たちが溢れ返っている現代社会の現状を説明することはできない。2016/12/6

#### 596. 真冬の成層圏

今日は、昼食前にノーダープラントソン公園へランニングに行ってきた。先日書き留めておいた自分の日記に触発され、身体意識を整えるために、そしてそれを鍛錬するために、日頃の運動をより大切にしたいと思う。自分の足で走ることによって、地に足をしっかりと着ける形で日々の生活を送

---

れるような気がしている。大地をこの足で噛みしめることは、今の私にとって大きな意味を持っている。

クネン先生の研究室に訪問するために、昨日もこの公園を通ったのであるが、歩いている時と走っている時とでは、印象が随分と異なるものだった。唯一変わらないものは、この公園が醸し出している何とも言えない観想的な雰囲気であろう。

公園内の芝生や木々。公園内の凍り始めた池を指で示す母親とその池を好奇心の眼で眺める子供。池の上を泳ぐアヒルの群れ。公園内を活発に走り回る犬たち。公園を通り抜ける人々。それら全てが、この観想的な雰囲気の中に溶け込み、一つの大きな総体を形作っているかのようである。この観想的な世界の中では、全てのものが紛れもなく一つとして顕現しているのだ。

私は、公園から自宅に向けて再び走り出した。いつも以上に、近所の教会が大きく見えた。物の大きさが変化する裏には、必ず自分の知覚と認識の変化があるはずである。その教会に張り詰めた緊張感のようなものを感じたのは、なぜだったのだろうか。それについてはまた考えなければならない。

自宅の前に到着し、整理体操を始めた。首を回しながらふと空に目をやると、そこには、吸い込まれそうになるほどの広大な清らかな冬の空が広がっていた。空しかない空である。冬の空固有の薄青色が、私の視界一面を埋め尽くしていたのだ。私は、もう空を見ることしかできなかった。

自分の顔と空を平行にする形で、その空を静かにじっと眺めていた。清らかな空の先に、清らかな成層圏が広がっていた。そして、その成層圏にも無限の階層があることを直感的に把握し、地上から成層圏を貫く無限の階段を駆け上がるかのように、私の意識がどんどん拡張していった。この拡張はとどまることを知らなかった。

意識の拡張に合わせて、自己が縮小していくことは大きな発見であった。地上から成層圏を貫く無限の階段と、意識の階段はつながっているのかもしれない。フランスの哲学者ピエール・テイヤール・ド・シャルダン(1881-1955)は自身が提唱した宇宙論の中で、物質圏(physiosphere)と意識圏(noosphere)との関係性について言及している。テイヤール・ド・シャルダンの考えでは、意識圏は物質圏を含んで超えている、と捉えられている。しかし、視界一面を埋め尽くす空を仰ぎみていた

---

---

その時の私にとって、意識圏と物質圏は、対等の関係を結び、両者はどちらも無限の階段を持っているように思えたのだ。

無限に拡張する意識の最中、欧州で過ごすこの二年間は自分にとって、観想的な時期なのだと思う。静かな観想的な生活の中で、絶えず継続的な鍛錬を自らに課すことが強く求められている。真冬の成層圏のその先に、新たな自己の形を見る。この冬を越え、その先の二年間を、今感じているような黙想的な意識の中で、継続的な鍛錬を伴う日常を送っていきたい。2016/12/6

### 【追記】

この日に見た「真冬の成層圏」は、未だに鮮明な印象を私の内側に残している。この日記が執筆された当時、観想的な生活を意識の上に上げる形でそうした生活を営んでいたことに気づく。しかし今は、そうした観想的な生活というものが常態化し、次の段階の生活実践に移っていることを見取ることができる。それは観想からの行動であり、観想を通じた関与を実現させる生活のあり方だ。絶えず絶えず黙想的な意識が続く中、絶え間ない実践活動に従事しているというのが今の自分の日々のあり方である。フローニンゲン:2018/3/31(土)17:08

### 597. 下痢と咀嚼

情報の咀嚼について改めて考えるきっかけを与えてくれたのは、何気ない日常の出来事であった。オランダで生活を始めて以降、一ヶ月に一度のペースでお腹を壊す事態に見舞われていた。とかく変なものを食べたわけでもなく、いつもと変わらない健康的な食品を食べているつもりでも、お腹を壊すことが定期的にあったのだ。

私がサンフランシスコでヨガのインストラクターの資格を取得しようとしていた際に、人体の構造について扱う解剖学(anatomy)と身体の構成要素の機能について扱う生理学(physiology)を学んでいた。その時に、自分がいかに人間の身体について無知であるかを思い知らされたのを覚えている。同時に、人間の身体がまさに小宇宙と呼ばれる所以も、その時に掴んだように思う。

最近では、物理的な人間の身体について探究することはめっきり減ってしまったが、それでも、それは非常に関心をそそる対象であり続けているのは間違いない。昨日、ちょうどお腹を壊す事態に見

---

舞われたので、下痢の仕組みについて調べていた。下痢を催す要因は、幾つかの種類があるが、過去の経験データを振り返ってみると、私の場合は、どうやら消化不良が原因のようだと突き止めた。

基本的に私は、普段の食事を非常にゆったりとしたペースで取るように心がけている。つまり、できるだけ食べ物をよく噛み、しっかりとそれを咀嚼しながら味わうことを心がけているのだ。しかし、時折、噛むことを忘れて何かを考えている自分がいることに気がつく。実際に昨日も、食事という行為に全身全霊が傾けられておらず、食事中にあれこれと考え事をしており、何らかのアイデアが浮かんで、食卓から書斎に駆けつけてメモを取る、ということを何度か繰り返し行っていた。

意識が食事に向かっておらず、抽象的な概念に向かっているのは、消化が悪くなるのも無理はないだろう。それにしても、抽象的な思考運動は実に厄介だと思った。言い換えると、抽象的な思考運動は、身体的な運動に引けを取らず、あるいはそれ以上に、その運動に従事している最中に快楽物質を放出し、他の活動を遮断させてしまうような力がある、と感じたのだ。

湧き上がるアイデアに無我夢中の時、私の意識は思考運動を促すことにだけ使われており、消化器官の運動を妨げていたことにはたと気づかされたのである。私が下痢を催す最大の要因は、思考世界への没入による、食事に対する意識の欠落にあったのである。

それが判明して以降、観想的な意識状態の中で食事をとることを心がけるようになった。こうした事態は、食事への向き合い方のみならず、情報への向き合い方にも表れているだろう。情報を真に咀嚼するためには、観想的な意識状態の中で情報と向き合うことが重要なのだ。身体世界の下痢よりも、思考世界の下痢は気づきにくいものであるだけに、非常にタチが悪いと思うのだ。食べ物と同様に、情報もよく噛むことを忘れてはならないだろう。2016/12/6

#### 598. 新・新ピアジェ派としての私

今日は早朝から、現在進行中のオンラインゼミナールの最終回の講義資料を作成していた。最終回は、知性発達科学の歴史の変遷を辿りながら、知性や能力の発達に関する近年の思想や理論などを取り上げる予定である。

---

厳密に知性発達科学の源流にまで遡るのであれば、仏教の意識の発達思想やヨガの理論体系などに触れなければならないだろう。しかしながら、そこまでテーマを拡張してしまうと收拾がつかなくなってしまうので、知性発達科学の中でも重要性の高い発達心理学に焦点を絞り、発達心理学という領域を開拓したジェームズ・マーク・ボールドウィンからストーリーを始めることにした。

その後は、ボールドウィンから多大な影響を受け、発達心理学に大きな貢献を果たしたジャン・ピアジェの生涯と仕事を辿っていく予定である。ピアジェに関しては、個人的にとっても思い入れが深い。なぜなら、私が師事をしていたロバート・キーガン、オットー・ラスキー、カート・フィッシャー、そして、現在フローニンゲン大学で師事をしているポール・ヴァン・ギアートやサスキア・クネンといった研究者は一様に、ピアジェから多大な影響を受けており、自分がピアジェの系譜を辿っていることを強く感じるからである。

さらに、今年の夏に、ピアジェの生誕地であるスイスのニューシャテルに実際に足を運んだことによって、ピアジェがより近い存在になったように思う。ピアジェの生誕地で、彼が遙か昔に見ていたであろう景観を自分も眺め、彼が吸っていたであろう空気を私も吸うことによって、私の中にあるピアジェがより大きな存在になったと思っている。

そうした個人的な思い入れのあるピアジェを扱った後に、新ピアジェ派と呼ばれる研究者たちの思想や業績について簡単に紹介したいと思う。実は、私のメンター的な存在であるカート・フィッシャーは、元々は新ピアジェ派に括られる研究者であった。だが、フィッシャーがユニークなのは、研究者としてのキャリアを深める中で、自身の新ピアジェ派的な発達思想や研究手法を乗り越えていったことにある。新ピアジェ派の他の多くの研究者は、基本的に、一度強固に形成された自身の発達思想から脱却し、新たな発達思想を醸成することはない。

その点において、絶えず自分の研究をより深く高度なものに変容させていったフィッシャーの仕事の歩みは特異であり、なおかつ尊敬に値する。新ピアジェ派を取り上げた後は、最後に、「新・新ピアジェ派」の発達思想や研究手法に触れたいと思う。発達心理学のテキストを眺めると、新ピアジェ派までの思想区分は、様々なテキストの中で明確に記載されている。



---

しかし、知性発達科学の領域の最先端で現在活動している研究者を新ピアジェ派として括るのは、非常に乱暴な試みに思える。なぜなら、近年の研究者は、新ピアジェ派の発達思想を受け継ぎながらも、それを含んで超えるような思想を形成しており、さらには彼らが活用する研究手法も非常に斬新なものになってきているのだ。こうした背景には、発達科学が積極的に複雑性科学の知見を取り入れ始めているという事実があるだろう。

厳密に歴史を遡れば、先日サスキア・クネン教授から耳にした話だが、ポール・ヴァン・ギアートは、30年以上も前に、コンピューターが大学の研究機関で徐々に活用され始めるようになった時から、複雑性科学のアプローチを活用したコンピューターシミュレーションを通じて、発達現象の解明に向けた探究をしていたのだ。そうした意味で、ヴァン・ギアートは、新・新ピアジェ派の開拓者の一人だと思っている。

ヴァン・ギアートのように、比較的古くから複雑性科学の領域の中のダイナミックシステムアプローチを活用していた研究者は、その他にも何名かいる。例えば、エスター・セレン、アラン・フォーゲル、マーク・レヴィスなどである。おそらく、構造的発達心理学の系譜を受け継ぎ、知性や能力の発達現象にダイナミックシステムアプローチを活用している研究者は、世界中で20-30名程度ではないかと思う。もちろん、私のように駆け出しの研究者を含めれば、もう少し人数が増えるかもしれない。

新・新ピアジェ派の萌芽は、四半世紀以上前に生まれていたのだが、現在においても、新・新ピアジェ派の思想を持って研究に従事している人は少ないように思う。今回のゼミナールの最後のクラスでは、新・新ピアジェ派の発達思想や研究手法についても取り上げていきたいと思う。

ピアジェ派や新ピアジェ派の考え方は、過去の自分が通過してきたものであり、そこから徐々に脱却したものであるため、客体化させることは比較的容易である。しかし、新・新ピアジェ派の思想は、現在の私が信奉しているものであり、その思想が実証研究と歩みを合わせる形で徐々に洗練されていくものであるため、客体化させながら説明を行うのは少し難しいかもしれない。現段階で、自分がどのような発達思想に立脚して発達現象を眺めているのかを明瞭にすることに関して、講義資料を作成する過程そのものが有益だと感じた。2016/12/7

---

## 599.「キャリア形成」なるものについて

先日からしばらく、何かを創出することについて強い関心が続いている。結局のところ、私が関心を持つことのほとんど全ては、発達現象と密接に関係していることに気づく。一人の人間の中で、絶えず無数の関心事項が生まれるということと、それらの無数の関心事項が、その個人が持つ一つの究極的な関心事項から派生している、という現象は面白い。

私は発達現象を究極的な関心事項に据え、少しでもその関心事項の深淵に辿り着こうとするために、無数の派生的な関心事項と向き合っているのかもしれない、と思う。探究的な営みは、人間の発達プロセスそのものに他ならず、常に紆余曲折を経ながら進行していく。この「紆余曲折」という現象のおかげで、探究という大河の幅が広がり、深さが増すのである。

私が取り組んでいる知性や能力の発達研究というのは、つまるところ、これまでの段階では生み出すことのできなかつた意味や機能を新たに創出していくプロセスを扱っているものだと捉えている。新たな意味や機能を作り出していくこと以外にも、新たな知識の体系を築き上げていくことなども、私にとって大きな関心事項である。

このような関心事項を抱えた状態で、昨日ふと、「キャリア形成」という概念について考えさせられていた。キャリアを形作っていくことの意味は、私の関心事項と重なる部分があると思ったからである。ただしここでは、世間一般で言われているようなキャリア形成の意味とは全く違う意味付けを私は行っているようだ。既存の職種から、自分の特性に合致するような仕事を選ぶ作業は、キャリア形成では全くないと思うのだ。

自分の特性に真に合致する仕事を、既存の職種から探そうとするのは、幻を追いかけるような行為に等しいように思う。つまり、世間で言う「キャリア形成」という言葉は、自ら自律的にキャリアを創出していくという意味ではなく、自分の外にある既存の仕事を選別するような意味に成り果てているように思うのだ。自分のキャリアを形成していくというのは、結局のところ、この世界に対して、仕事そのものを自分で創り出していくことに他ならないのではないかと私は思う。自分に合致する仕事を外側の世界の中でいかに見つけようとしても、見つかるはずはないのではないだろうか。

---

仮に見つかったと思ったとしても、それらは往々にして、社会の風潮や他者の色に染められたものであり、自分に合致した仕事であるように思い込ませる巧妙な偽装が仕掛けられたものだと思う。先日言及したように、この話題は、情報の単なる消費者と情報の生産者を扱った話題とも関係しているだろう。情報の単なる消費者は、既存の選択肢の中から仕事を選んでいくことしかできない。

一方、情報の生産者には、自らの仕事を生み出していこうとするような気概と能力が備わっているように思えるのだ。情報の単なる消費者と情報の生産者との間には、埋めることのできない大きな溝があり、情報の生産者はごく少数であることを考えると、大多数の人々が自分に合致した仕事を見つけることができない、という現状にはうなづけるものがある。

自分に真に合致した仕事を外側に見つけようとするほど、自分の内側から外側に向けて新たな仕事を創出していくという意識が弱まる。そうなってしまうと、自分のキャリアを真に形成していくという道から外れてしまうように思うのだ。キャリアは外側から選ぶものではなく、とことんまでに自分の内側から外側に向けて創り出していくものだと思う。キャリアを「作る」という発想から、キャリアを「創る」という発想への転換が求められつつある時代になってきているように感じるのは、自分だけだろうか。2016/12/7

#### 600. スキャフォールディングという支援の恩恵

11月の初旬から毎週末開催しているオンラインゼミナールのクラスを自分でも少し振り返っていた。先日のクラスでは、発達支援に有益な概念を四つほど取り上げた。そのうちの一つは、「スキャフォールディング」と呼ばれるものである。スキャフォールディングという言葉を使い換えると、「足場固め」という言葉を当ててもいいだろう。

端的に述べると、スキャフォールディングとは、他者からの適切な支援のことを指す。よちよち歩きの幼児がしっかりとした足取りで歩けるように、両親が幼児の体を支えてあげるようなイメージである。または、幼児が歩く道に障害物があれば、それを取り除いてあげることによって、幼児が歩きやすくしてあげるようなイメージである。これらのイメージからも、スキャフォールディングには、二種類のものがあることを想像することができるだろう。

---

一つは、直接的なスキヤフオールディングと呼ばれるものである。これは、支援者から実践者に対して、手取り足取り支援することを意味する。実践者があるタスクをこなすことに苦戦していれば、支援者自らがそのタスクの一部を行い、タスクの遂行の仕方を身をもって示すことなどが該当する。よりわかりやすい例で言えば、武術を習いたての実践者に対して、言葉だけではなく、実際に実践者の腕を掴んで技のかけ方を身体を通じて教えることは、直接的なスキヤフオールディングの最たる例である。

そして、もう一つのスキヤフオールディングの種類は、間接的なスキヤフオールディングと呼ばれる。これは、支援者から実践者に対して、手取り足取り支援をするのではなく、何らかのフレームワークや実践のヒントを提供することを指す。先ほどの幼児の歩行運動の例にあるように、両親は直接的に幼児の身体に触れなくても、間接的に幼児の歩行を助ける支援ができるのだ。幼児が歩く道の上の障害物をさりげなく取り除いてあげることは、「幼児にとって歩きやすい道」という型を提供することを意味している。

その他にも、武術の技のコツを比喩的に言葉で実践者に示すことは、間接的なスキヤフオールディングと言えらるだろう。さらには、パワーポイントの活用や企画書の構成案を作成することも立派な間接的スキヤフオールディングである。想像していただきたいのは、例えば、二時間何か特定のテーマについて説明をしなければならない時に、パワーポイントなどの資料なしに話を順序立てて行うことはできるだろうか？一般的に、それは至難の技だと思う。

私たちはパワーポイントというツールを活用することによって、二時間にわたって順序立てて説明をする、というタスクをうまく遂行することができるのではないだろうか。つまり、パワーポイントのスライドが、ある種の「フレームワーク」としての機能を果たし、私たちはそうしたフレームワークの恩恵を受けながら、話を順序立てて行うことが可能になるのである。

これはまさに、間接的なスキヤフオールディングである。企画書の構成案についても同様のことが言えるだろう。構成案というフレームワークがあるからこそ、そこにコンテンツが埋まっていき、一つの企画が成り立つのである。日常生活を振り返ってみると、何気ないところに、直接的・間接的なスキヤフオールディングが存在していることに気づくだろう。私たちは自分の知らないところで、他者や様々なツールによる支援を受けているのである。

---

自分を取り巻くスキヤフオールディングが何かを列挙することによって、その数の多さに驚かされるとともに、いかに自分が多様な支援の恩恵を受けているかに気づくだらう。それに気づくことができれば、スキヤフオールディングを自覚的に自分で活用するが可能になり、さらには他者の成長支援に対して、様々なスキヤフオールディングを提供できると思うのだ。2016/12/8